

私が本協会の会長を引き受けて初めて本牧亭の例会に出掛けた時、この小屋に大変興味を持った。勿論脳筋のお座敷的な会場はそれまでに他の邦楽でも知っていたし、またこの本牧亭も全く知らないかったわけではない。だが私が面白いと思ったのは、小屋の作りや、客席の壁に寄り掛かって聴いている恐らく馴染み連なのであらうお客様さんなどの雰囲気と言ふものが、私が昔から本で読み、古老から話を聞いていた女義太夫の観念にビタリだつたらである。正直言って私も余り座る習慣から大分離れてしまつてるので、胡座をかいても長時間座っているのはやはり苦痛である。空いていれば後ろの椅子を引っ張り出して腰掛ける。だが座る苦痛はある意味気に比

べるとそれ程大きなことではない。私もどうも本牧亭に取り憑かれてしまったようであった。

しかし吉川前会長は義太夫の将来の為には、普通の新しい会場でやる方が良いのではないと屢々私に言わされた。こゝでは若い人をひきつけることが出来ないと言うわけである。私は段々と協会の内部を知つてみると、会員の皆がこの小屋に対して余りにも強い愛情を持っていることを知った。義太夫協会と本牧亭、それは普通では全く切り離すことが出来ないものとなつてゐた。もし本牧亭の舞台に上がらしてくれないなら私は脱退するとさえ言ふ人がいたほどである。

戦後四十年の間毎月この舞台で行われた女

# 義太夫

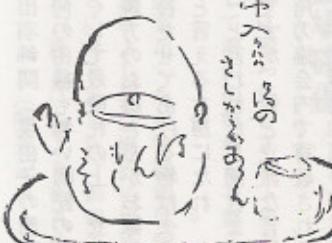
義太夫協会会長

田辺秀雄

義太夫協会会報  
第46号(特集本牧亭)平成元年11月20日  
社団法人 義太夫協会発行  
〒104 東京都中央区銀座  
6-18-2 新橋演舞場B2  
TEL (541)5471

義の公演はまるで義太夫の筋書きのように、協会としての喜怒哀樂を繰り広げて来たと言えよう。今年の夏も近く公演のある日、私はそこで驚くべきニュース、即ち本牧亭が今年一杯で廃業するということを聞いたのである。本牧亭の廃業は時勢の然からしむところで止むを得ず、よく考へれば、これまで続けて來られたことについて我々は深く感謝せねばならないと思う。だがこれから公演をどこでやるか、適当な会場を見つける、幹部の人達は大忙がしになつた。ところが前会長が国立劇場の会議で話されたことがきかげとなり、義太夫は国の文化財として指定されているのだからと、国立劇場では理事長を初め、幹部の方々が深く理解を示され、来年から国立演芸場で毎月の公演が可能になった。

私は今までの本牧亭時代を昭和の義太夫協会と考え、それは戦後の義太夫再興の時代であり、国立演芸場からを平成の義太夫協会とし、次の代への発展の時代としたいと思う。この機会を利用して義太夫界の近代化を是非図らねばならない。終りにのぞみ、困難な義太夫の再興を可能にして下さった本牧亭の石井英子さんには深甚の感謝を捧げる。



## 懐かしい本牧亭さん

相談役 豊澤猿三郎



以前の本牧亭さんは、木戸を入ると、おぢさん（勝つあん）の「らっしゃい」と威勢のよい声で下足札を貰い、階段を上ると、左側が売店。少し臺の立ったお茶子さんのいらっしゃいませの笑顔に送られて客席へ入ると左側に御定連の高野さん御夫婦、入船堂さん、吉田さん、中井さん、五人様の御布団が敷いてある。本当に寄席風景の漂う席でした。

昭和二十六年一月女流義太夫発足に就いては、本牧亭社長石井英子さんの快気と綾之助師（二代目）の一方ならぬご尽力であったことは見逃せないのです。其の頃は出演者も大勢で、亡くなられた方を一寸思い出しても綾之助、重之助、越駒、素昇、住若、住助、猿司、糸三、小津賀、和光、小和光、素康、素龍、住春、若好、弥周、清司、三味線では清一、清寿、清三、紋教、猿玉、猿昇、猿幸、猿清、才綱、三生、勝八、巴住、素女若、仙玉、和歌吉の皆さんで、現在の十倍も居られました。そんな訳で、日数も余計かかりますので、本牧亭さんのご好意で、毎月四日間ずつ興行させて戴きました。此の四日間の出演順や、語り物の配置で、綾之助師は随分心をお使いになつたこととお察し申します。三味

線でも、猿幸は自分の気に入った太夫さん二人だけしか弾きません。三生は、頼まれればいやと言わない人なので、八人の太夫さんを弾いていました。太夫さんは、梅組とか、藤組とか、組を作り、十二月の忠臣蔵とも成ると、誰それは四段目と七段目の由良之助を両方やる、横暴だ等と、一つの組の中でも揉める。綾之助師はホトホト困って、二十七年の忠臣蔵の前に私に「誠に筋違いのお願いやけど、今年の忠臣蔵の役付けを頼みたい」と申され、私もお断わり仕ようと思いましたが綾之助師がお気の毒なので「お気にいるからぬか分かりませんが、お手伝い致しましょ」とお請け合い致しました。そして同師と私はオザイバーとして、入船堂さん、吉田さんとお立ち合いの前で役付けを致しました。

隅斗氏の葬儀の折等、三味線でお送りでした。話が戻ります。本牧女流義太夫の発足当初は、太夫さんも何十人と居られましたので、席前の職も競演会と染めてありました。今日では、人數も少なく、字も穩当でないので競の字は取りました。四十年前、中堅で出演していた綾枝（三世綾之助）、越道、駒龍、素八、三味線の駒登久の皆さんも、今日では大層上達しました。殊に三味線は、重輝さんのきびしい稽古でメキメキ上達しています。

私も昭和六十二年から毎月樂屋へ詰めて、憎まれ者に成つて居ますが、僅か三年で皆が後は何かとご相談に見えられました。正月の七草に悠玄亭玉介師をお招きして、獅子舞でお家の内を淨められるのが吉例で毎年お招きにあづかりました。三十四年お亡くなりになつた折、同師宅前を出羽錦関（現田子の浦親方）が通りかかられ何の由縁も無い師匠の柩に向い合掌祈念、暫くして最敬札の上、立ち去られました。此の親方のお嬢さんがお嫁に行く時、「あんたに持たせてあげる物は夫を初めどなたにもハイと言える女房になれ。これがわしの贈り物だ」と言われたと聞きました。何でも無い言葉ですが、何と立派な言葉では有りませんか。角力協会内で尊敬されるのも当然の事と存じます。綾之助師の御出棺の時、三生他五人の方に三味線を持って戴き、静かに野崎村の堤の送りを弾いてお送りしました。それこそ、靈柩車の扉を開けて、いつものあのニコニコしたお顔で、有難うよ、有難うよと言わわれている様に思いました。其の後、松尾武市先生の御母堂様の告別式、小林隅斗氏の葬儀の折等、三味線でお送りでした。

話が戻ります。本牧女流義太夫の発足当初は、太夫さんも何十人と居られましたので、席前の職も競演会と染めてありました。今日では、人數も少なく、字も穩當でないので競の字は取りました。四十年前、中堅で出演していた綾枝（三世綾之助）、越道、駒龍、素八、三味線の駒登久の皆さんも、今日では大層上達しました。殊に三味線は、重輝さんのきびしい稽古でメキメキ上達しています。

樂屋其の他の運営も、副会長の朝重・駒之助の両名が、キツチリ手を組んで計つて居ます

ので、安心です。思い出多い本牧さんとも、十二月二十一日を以てお別れです。本牧亭社長・石井英子様、本当に永い年月、有難う御座いました。今後の御榮展をお祈り申し上げます。

### 猿三郎師より御寄付 百万円！

— 来年からは毎年祖先祭で —

前号掲載のとおり、七月九日の総会席上で猿三郎師より百万円を御寄付頂き、しかも、「私の命の続く限り毎年回向院の『祖先祭』で百万円づつ寄付します」という有難いお約束までして下さいました。大感激です！

### エイボン女性賞

おめでとうございます

### 本牧亭のおかみさん

戦後四十年間、本牧亭の灯をともし続けた石井英子さん（義太夫協会顧問）が、<sup>89</sup>エイボン女性賞「功績賞」を受賞されました。義太夫協会では、単に演奏会場の提供だけなく、見台・肩衣等の諸荷物も預かって頂くなど、一方ならぬお世話になりました。どうも有難うございました。

本牧亭で永年続いた譲談以外のもの、落語・新内・琵琶・浪曲などを集めた本牧亭主催の会が12月12日に行なわれます。女流義太夫は、駒龍・駒登久がサワリを。中山千夏・矢崎泰久・永六輔・岡本文弥氏ほかの予定。

## 新役員決定

去る七月九日の通常総会で、任期満了にともなう役員の改選を行なった結果左のとおり、新役員が選出されました。選ばれた役員は、向後三年間を運営して参ります。御高承の上、今後とも一層の御支援御鞭撻を賜りますようお願い申上げます。

尚、業務分担ならびに、顧問・常任相談役等は、只今就任を依頼中の方もござりますので、新年に発行予定の会員名簿'90にて御報告させて頂きます。

### 役職一覧（五十音順・印新任）

理 事	常 務 理 事	副 会 長	田 辺 秀 雄
野 豊	澤 鶴	竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹 竹	田
澤 澤	澤 澤	澤 澤 澤 澤	辺
錦 吉	幸 重	本 本 本 本 本 本 本 本 本	辺
輝 平	綠 治	本 本 本 本 本 本 本 本 本	辺
*	*	*	*

監 事	景 山 正 隆
相 談 役	吉 川 英 史
名 誉 会 長	佐 々 木 明 郎
相 談 役	猿 三 郎
名 誉 会 長	山 田 隆

情報をお尋ねください。  
荷物置場確保！

45号の「荷物置場に困っていますー虫のいいお願い！」に対して沢山の情報を有難うございました。

本牧亭で一番の懸案だった荷物置場は国立劇場の特別の御配慮により演芸場内に場所を確保して頂けることになりました。御報告と同時に関係各位のお力添えに心より御礼申し上げます。

# ある定連のひとりごと

— 高野俊雄氏に聞く —



追悼 豊竹団司師

団司さん（以下芸名敬称略）を何度も訪ねたけど「高野さん、本牧亭はどうなっていますか」これが一番先で、それからお早うだのヨンニチワだのになる。「本牧は女義のため残しといてくれ、残しといてくれ」ってネ。「高野さんのためなら、五条橋の上でも語る」貰つて……生涯使つた高座湯呑を生き形見に貰つて、僕にはどのお師匠さんにも替え難いお師匠さんだった。

## 本牧亭での第一回女義の会

五日間やつてた時代から聴いてるよ。（女義の）本牧亭の初日から行つてたけど、サアその日素女さんが出てたのかどうか……素女さんの義太夫ってのは、とうとうわからずしまいだったんだ、僕には難しきぎり。

女義の席がないんで、本牧亭のおみさんには「どこかに女義の席がないか」って講釈聴きながら、責めてたことがあるんだよ。そしたら、戦後、本牧でやるようになつた。僕は渡りに舟で行くようになつたんだから、おそらく女義を初日から聴いてるのは僕だけじゃないかな。

## 松鯉・素龍二入会

松鯉の会のプロは僕がずっとこさえてたんだけど、文楽や円歌にスケ（助演）を頼むのも（経済的に）大変になつて、もうやめたいって僕の家へ来る訳だ。一方、素龍を御殿鼠の吉田さんが素龍を売り出したがつてた。最初、松鯉はウンつていわなかつたけど結局僕が間にひつて、最初は素龍がクチで松鯉がキリ。吉田さんが、ジャンジャン切符撒くから、客が入つて盛り上がる、すると松鯉がクチへ回つて素龍がキリ、そうして一人会になつたんだよ。その内、素龍のところへ稽古に行つて、吉田さんが月謝だして、松鯉は廿四孝を稽古した。池田先生は松鯉の義太夫はお聞きにならなかつたようだけど、僕は口三味線で語るのを聞いてるよ。アア、僕の家でチャブ台はさんで、探せばテープもあるかも知れないけど。

## 定連がこしらえた会

僕は辰五郎って人形遣いと親しくしてたんだけど、「どこかに若い者の稽古場がないか、修業させたい」といつも言っていた。そこで、女義のお師匠さんに話したら、皆さんが乗つてくれた。どういう興行形態かというと、

本牧の小屋代と祝儀は僕がもちましよう、芸人さん達は、出演料はナシ、その代り切符は、その時分四、五百円だつたと思うけど、何枚売ろうと全部御自分の収入に。事務的な金の出し入れは若き日の日置さん（現竹本綾太夫）に手伝つて貰つた。

せんべ屋さん、いつもこう呼んでたけど入船堂の旦那が心配してくれて、紙屋さん（中井さん）、吉田さんとが補助してくれて。この吉田さんって人が切符ジャンジャン撒くから吉田さんがやつたと思つた人も多かつたようだけど、芸人の折衝から何から僕がやつたんだよ。そう、二、三回やつてるかなあ、芸術祭のポスターとチラシに使つた写真はその時の一枚つてことになる。

## 今の女義と昔の女義

ちょっとと思い出しても、小土佐・素女は別にしても、土佐廣・小津賀・重之助・二代綾之助・越駒・清一・猿玉・猿幸・三生・紋教……本牧で女義が始まった時の年令が、今この副会長くらいだと思う。いまは、その世代が二人しかいない。後に続く若い人が五十、六十になつた時、昔の芸域に達するかどうか、僕には疑問なんだね。若い人に進歩が見えると僕はうれしい、たまに大向こうから手がくるような芸やつたって、僕はうれしいと思うんだけど。

最近の東京の芸人さんはブライドだけは高いけど、芸はブライドの半分もいっていないと思う。ブライド以上の芸力をもつた方も何

人かおいでになるけど。昔と違って世の中異なってるからね。本牧のおかみさんとこの間も話したけど、今度のことは勿論経済的なことが第一だろうけど、第二、第三には寄席の芸人がいなくなつたことがあるようだね。おかみさんが諦めてるくらいだから、求める僕の方が間違ってるんだよ。

### 修業

今の女義さんは、舞台まで男(文楽)の真似をしようとしてるのかなあ。稽古は大いにかけて貰つたらいい。団司から何回もきいてるけど、基礎の三年間を死に物狂いで、死んだ気になつてやれば、あとはその応用問題だそうだ。僕も自分の商売(印刷)でも思い当たる。みっちり、寝る間もない位、血ヘド吐く位修業すれば三年だよ。ホントは十代のうちにいいんだけどね。僕なんかは、頭が悪いし、体も丈夫じゃないし、資力もないから、人が三年ならオレは十年と思ってやってきた訳。

団司・土佐廣の話を聞くと、御自分で気がつかないけど、最初の三年間は気違ひみたいに稽古してるんだよ。それを三十年続けてはいないでしょ。まだ何もわからない時代に、稽古してもらってもその時分にや何も覚えてないかもしけないけど、体が覚えてる訳よ。年月がたって、サテって時に、体が覚えてるから頭の方へ信号が行く。今のは「いろはにほへと」を教わつてないんだよ。いろはを教わつてから色んな字が書けるんでしょ。以上、団司からの受け売りです。

### くれない族

現さんは、通いの弟子だつたらしいんだけど、師匠は三食いっしょに食べても口きかないんだって。お稽古してくれつても知らんぷり。「大家さんはタンスがここにあって、便所がこっちで、あそこに猫がいて」こういうのを背中にしょつていかないと返事もしないって訳だよ。今の人たちは、くれない族だからね。師匠が○○してくれない、協会が○○してくれない、お客様が○○してくれない……だからブライドが高い。

### せんべ屋さんを怒らせた話

ある時、入船の旦那が「こんな所へ死んでも来ない!」ってタンカ切つて帰っちゃつたことがある。お茶子の一人が、御祝儀の出ないお客様を案内して、足で座蒲団を寄せたらしいんだね。それをせんべ屋さんが見てて注意したらフンつてやられた訳だ。昼夜本牧に来て、毎度祝儀入れてたせんべ屋さんを怒らしちゃあ!。「お茶子の方が悪いけど、あの気性じゃ謝るまい、おかみさん、どうするんだ」といつたら、「アタシは客商売、お客様に謝つてすむならいくらでも謝るから高野さん、間に入ってくれ」って。偉いネ。

いってみれば十七・八のアンちゃんを堀川一発で五十年間虜にしちゃつたその芸だよね。僕は典型的なバカの見本みたいな者だけど。そうする内に、太夫さんにも関心示して、とうとう女義の一番古い客になつたという、長いようで短い話です。

ライドが高いからね。何も僕の所へ挨拶に来いっていうんじゃないんだよ。「切符もつてきました」「そうか、じゃ手拭いだけ貰つところ」って言えるかい? 手拭いは師匠に作れって言われたから作つただけかい? 手拭いはモノ言うんだよ。

### 女義との運命的な出会い

おやじに男の芸じやなきヤダメって言われてたから、初めは、女義をバカにしてた。たまたま浅草の「東橋亭」の前を通りかかってフラッと入った時、猿幸・三生が「堀川」をやつてて病みつきになっちゃつた。それを聴いてブルブルッ! あの時の感激は忘れられないもの。昭和十年代ですよ。猿幸はその頃、三十だと思う。それで東橋亭へ通うようになって。その頃は、東橋亭以外には女義の定席はなかつたと僕は思う。その東橋亭が戦災で焼けて、戦後復興しないもんだから、本牧のおかみさんに「ないか、ないか」って聞いてた訳だ。

\* 本牧亭に最も縁の深い、義太夫の御定連で一番若かった高野さん(常任相談役)にお話して頂きました。

## 本牧亭の思い出

### —講釈と女流義太夫とわが青春—

相談役 池 田 弘 一

昭和二十年代なかごろから三十年代のなかにかけて私は実によく本牧亭へ通ったものだ。講釈場はここしかなくなっていた。八丁堀の聞葉はとうとう復興しなかった。佃島に出来た席も長続きはしなかった。鶴殻町の喜扇亭も開けたと思つたらすぐに姿を消した。本牧亭は広い東京にただ一軒の講釈席でありながら何時もすいていた。すいていたというより客がまるでいない日も続いた。さしへ聞くということすらあった。やるほうもつかつたろうが、聞くほうもつらかっただろう。名人はともかくとして、上手といえる人まだ大勢いた。南龍・貞吉・松鯉・桜州・如燕・若燕・伸といつた人が講談ではない、講釈というものを聞かせていた。

「夜も面白いよ」と私に声をかけてくれた年輩の定連がいくたりかいた。頭であつたり、正体不明の人であつたりした。その方々のところに居残った私は女流義太夫を聞くようになつた。今も手元に何十枚かの番組・チラシの類があるところをみると、私はよほど熱心に月初め四日間の公演を聞いていたらしい。

中入りには岡田・井村といつたお茶子が、どびんの湯を差しに回り、豆板・はつか糖などの駄菓子を売つた。私を誘ってくれた定連は豆板の幾つかを、当時客席の後方に階段があつてそのわきの狭い敷きの所につくねんとしていた神田松鯉のところに届けさせる。そして私もかき餅などの御余慶にあづかる。ご定連とはこうしたものかと私は納得した。私はいつの間にかお茶子さんにも覚えられ、

らしいというと暖昧な記憶のように思えるがそうではない。「忘れねば思いいださず」の類なのである。毎夜々々がそれぞれに面白く、昼の楽しみを夜に続けてくれていた。手控えには重之助・土佐広の名がしきりに出てくるが、私が最も好んだのは小津賀であったようだ。糸は紋教。その寺子屋は独自のものであつた。自分が卒業論文に「菅原」を取りあげ、「寺子屋」についてあれこれ調べていたころだつたせいもあって小津賀の口さばきの良さに魅せられた。山城が清六と別れる前、帝劇で出した寺子屋と共に忘れる事はないであろう。

中入りには岡田・井村といつたお茶子が、豆板の湯を差しに回り、豆板・はつか糖などの駄菓子を売つた。私を誘ってくれた定連は豆板の幾つかを、当時客席の後方に階段があつてそのわきの狭い敷きの所につくねんとしていた神田松鯉のところに届けさせる。そして私もかき餅などの御余慶にあづかる。ご定連とはこうしたものかと私は納得した。私はいつの間にかお茶子さんにも覚えられ、

ご定連のみに下足が内玄関の方へ回されるようになっていた。

あのころは、学生や若い者が膝をそろえて座って講釈や義太夫に聞き入るということは珍らしく、高座の人たちから一種の敬意をもつて扱われていたのである。

あくる晩の語り物が若手の声で披露される。あの声は今の誰の声だったのだろう。「猿幸・三生連れ弾きにて……」という触れがあると、満員の客席から期待のよめきがあがり、実はその瞬間から明晩の演奏は私の胸の中に始まる事になるのであった。当然、私はあしたのつとめるべきところをはしまって昼席に馳けつけ、松鯉の鬼箭の梅吉だの、若燕の姫妃のお百などを聞き、そのまま居続けて土佐広の久作・お光にため息をつき、オクリの連れ弾きに酔つたのである。

実際に幸せな日々であった。やがて松鯉は桂文樂らと共に義太夫の稽古を始め、それが新聞誌上にも報じられたが松鯉の義太夫は聞きそびれた。本人も語るところまでいかなかつたのだろう。そのかわりというように例月十八日の夜の松鯉公演はお師匠番の素能との二人会になった。素能の没後、文樂は愛宕下の素八宅へ現小さんを共にして幾度か顔を見せたという。そうしたちなんで何回かの素八会で文樂は「心眼」を演じている。

それにもしても当時の高座の人はどの芸界の人も行儀がよかった。そのよき伝統はわが義太夫協会の公演に引き継がれていると身びいきながら思うのである。二年ほど前、本牧亭

の夜席での落語の会では、客の質の下落、演者の思いあがつた口のききよう、あきれて座を立ってしまった。そんな時思い出すのは服部伸のものごしであり、伯鱗の丁重な口のききようであり、気さくでいながら抑えるところは抑えて動いていたお茶子の人々のことである。

昭和何年のことであつたろうか、おそらく「芸術祭」が始まつて間なしのことだつたらう。伯鱗が例の如く張扇で糸台に一の字を書き、「本日は芸術祭」とございまして審査の先生方もお早々と御づめかけてございます。お膝固め、佐野のお系図の……と口をきて「鉢の木」を語つたその日、南能の「名月若松城」は芸術賞をうけた。

思い出尽きない本牧亭と愈々別れる時、義太夫協会の芸術祭参加公演につながりを持ったということは実にうれしいことである。成功のためになんとか役に立ちたいという思いから当日の案内役も買って出た次第である。

(神田外語大学助教授)

芸術祭参加公演プログラムより転載

### 人間国宝・土佐広師に聞く

#### — 本牧亭の思い出 —

本来なら本号に掲載すべきところですが、発行日の翌日(11月21日)本牧亭の高座で話して頂きますので、次号で当日の誌上再現を。もしも、話しきれないほどであれば、改めて聞き書きを計画いたします。御期待下さい。

### 会員の便り

毎月のプロ、楽しくそして悔しく? 拝見しています。皆様に御心配をおかけしている私の目の方は、一年半以上経過しましたが、誠に遅々とした回復でお話になりません。左目は、どんな美人を見ても顔がぐしゃぐしゃに歪んで見える状態で、一寸表現できません。右目は正常です。それを常時両目で見ている訳ですか、とにかく容易でないのです。一寸間違えば脳出血だったそうですが、悪くなっている兆候はありません。

あれだけ好きだった義太夫・文楽・歌舞伎一切遠ざかっていますが、決して嫌

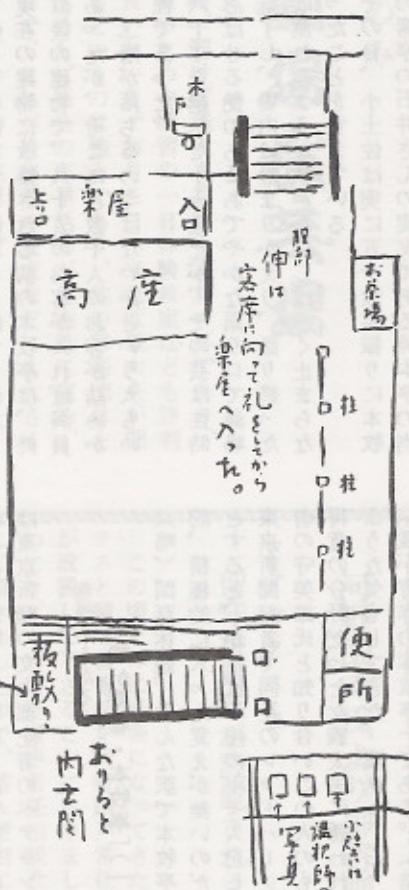
いになつた訳ではないのです。沢市さんも深雪も俊徳丸も皆ハッピーエンドですから、頑張っています。

皆様からお見舞状や、電話、招待状等戴きながら、全くお返事も差し上げないで御無礼を続けて居ります。手紙を書くのが疲れ大変なのです。行が真直に書けません。字の大小、インクの濃淡を判別できませんので、どうか御判断下さい。

皆様にくれぐれも宜しくお伝え下さい。益々の御発展を祈ります。

和田 博(特別会員・参与)

(ハガキ通信)



(カット 池田弘一氏)

# 竹本小土佐と本牧亭

守 美 雄

たしか昭和二十七年前後であったと記憶しているが、本牧亭の席亭の石井さんから、「何か企画はありますか」という話があり、私は、「小土佐さんに出で貰ったらどうでしょう」と話をしたことである。

その数日後、新聞社の仕事で小土佐さん宅を訪ねた私は、『一度本牧亭に出て「小土佐会』を開いて見ませんか』とすゝめたところ戦前から戦後にかけて長く寄席には出演していなかつた小土佐さんも、久し振りに出てみようという気持になり、本牧亭で『小土佐会』を開くことになった。

当時すでに八十才を過ぎていた小土佐さんであったので、私はひそかに健康を心配したが、非常に元気で、頭もしっかりしていた。現在の若い方は、『小土佐』といつても、全く知らない人が多いが、女義全盛期の明治二十年代から名を知られた当時のスターだった人である。

後に女義界の大立物となつた豊竹呂昇も、売り出した頃は小土佐の一席に入っていた。呂昇は、はじめ『仲路』の芸名で、五代目土佐太夫の門に入っていたので、小土佐とは同門であった。後に呂太夫の門に入つて呂昇

の名を貰い、明治二十五年、小土佐、呂昇の一座は京都の京極の席で興行をし、その美声と麗麗な語り口は、満都の人気を得て、十日間の予定の興行が、連日の大入りで、日延べを重ね、一ヶ月余、京都の興行物を圧倒しそう」という記録がある。

小土佐は呂昇よりも先輩で、又後に東京で大スターとなつた初代綾助よりも先輩なのである。その小土佐が、何十年振りに本牧亭の高座に登場することになった。新聞記者であつた私は、友人の各社の記者にこのニュースを伝え、各紙も大いに取り上げてくれた。

現在の建物に改築される前の本牧亭は、終戦直後の建物で、八十人のお客様が入れば満員であつたが、そこに百数十人のお客様が詰めかけ、二階が落ちるのではないかという人もいた程であった。

八十才を越した小土佐だが、その芸は往時を忍ばせる艶のあるあでやかな語り口で満場を魅了し、場内は静まりかえり、語り終つた時は割れるような歓声が、しばらく止まらないことを覚えている。

その日、小土佐は実に五十数年振りに本牧亭の席亭の石井さんの実父である鈴木亭の当

時の席亭と対面した。  
戦後の本牧亭の前身である昔の本牧亭は明治から大正にかけて、鈴木亭の経営で、やはり池の端にあつたといわれる。八十歳を超えた二人の話は、昔の本牧亭の話になり、その由来を聞いたところ、当時の席のあたりは、広々とした不忍池に面し、その状景がいかにも横浜の本牧海岸の雰囲気を感じさせることから名付けられたということを聞いた。  
近く姿を消す本牧亭の前身は明治時代からあつた席で、その昔、若い頃の小土佐も出演したことがあつたという。当時から義太夫と関係の深かった席なのである。

本牧亭の月報「ほんもく」十月号に、前号で『女流義太夫』の名付け親であることが判明した守美雄氏と女義との関連の深さが報われることが載っていました。著者の富田宏氏は東京新聞の文化部記者のベテランです。

巷談あらかると

「我が青春・本牧亭」(一)より

(略) 閑話休題。そんな訳で本牧亭にも自発的、積極的に入った覚えが無いのだ。ひょっとすると、かたばみ座のキモ入をしていた元東京新聞記者で同社のレッドバージ騒動犠牲者の守美雄氏と知り合いこの人のもう一つの得意の分野だった女義太夫に誘われていったような気もしてきた。漠然としているのが、「我が青春の本牧亭」である。(略)

本牧公演 残すは師走公演のみ

来年からは

# 国立劇場演芸場

戦後四十年間本牧亭で慣れ親しんで頂きました女流義太夫公演は、来年からは国立劇場の演芸場へ移ることになりました。すっかり定着した師走の「忠臣蔵」、二十日は心身障害児のための特別公演(チャリティ)、二十日が本牧亭での最後の公演となります。本牧亭のおかみさん・石井英子さん、社長の清水基嘉さん、実にいい雰囲気の下足のおじさん・中村勝太郎さん、ビラ字の久井田辰雄さん、売店の高瀬さん、そして何かにつけて「岩ちゃん、岩ちゃん」と頼りにされていた支配人の岩崎静子さん、皆様、どうも有難うございました。特に、事務所から客席・売店・楽屋・木戸、何処にいても何時もくるくる働いていた岩崎さん、本当にお世話になりました。

(略) 安藤鶴夫が「巷談本牧亭」を書いたのは二十五年も前のことだが、女流義太夫と本牧亭とのつながりはもうと古く、四十年の歴史を持つ。義太夫協会が、毎月二十一・二十二日と一日間の定期公演を持つことが出来たのも、こうした場所に恵まれたからだ。

戦後四十年間本牧亭で慣れ親しんで頂きました女流義太夫公演は、来年からは国立劇場の演芸場へ移ることになりました。すっかり定着した師走の「忠臣蔵」、二十日は心身障害児のための特別公演(チャリティ)、二十日が本牧亭での最後の公演となります。本牧亭のおかみさん・石井英子さん、社長の清水基嘉さん、実にいい雰囲気の下足のおじさん・中村勝太郎さん、ビラ字の久井田辰雄さん、売店の高瀬さん、そして何かにつけて「岩ちゃん、岩ちゃん」と頼りにされていた支配人の岩崎静子さん、皆様、どうも有難うございました。特に、事務所から客席・売店・楽屋・木戸、何処にいても何時もくるくる働いていた岩崎さん、本当にお世話になりました。

(時評「本牧亭の女流義太夫」より一部抜粋)

(略) 聞けば義太夫教室も定員一杯であり、教員のための講習や一日体験教室なども評判が良いという。毎月ここへ来れば義太夫が聞けるというのは強みであり、他の邦楽団体と比べると、協会の事業活動が企画性に富み、多彩で、これが後継者の養成などにも大きく寄与しているのを感じる。

幸い会場の方は、来年以降国立演芸場の特別の配慮を得られそうで、愁眉を開いた形だ。新たな事業の展開にも期待したい。

## 国立演芸場に 収納棚の備え付けも!

本牧亭は消えても、女流義太夫は消えません。河野国声常任相談役が御寄贈下さることになった収納棚の設計等、国立へ移るための準備が只今着々と進行中です。来年は、義太夫協会が社団法人になって二十周年、義太夫節保存会が結成されて十周年という記念すべき年にあたりますので、新たな気持で新しい会場に臨みたいと思います。

本牧亭から国立演芸場に移るに当たつて一番の懸案だった見台等諸荷物の保管

は演芸場内に場所を確保して頂けることになりました。それには、不燃材料の収納棚が不可欠です。

このたび、河野国声常任相談役は特注の壁面いっぱいの収納棚も設置して下さることになりました。

演芸場での定期公演でベストを尽くしてお気持に報いたいと存じます。

本当に本当に有難うございました。

(地下鉄半蔵門線の開通で便利になりました。)

國立演芸場へは、永田町からでも半蔵門からでも徒歩五分くらいです。

## ファンクスと 留守番電話が設置されます!

河野国声氏より御寄贈

## 女流義太夫共和国あれこれ（一）

竹本綾太夫

今からざっと三十年前、昭和三十五年三月一日（四日の本牧亭女義定席興行が「共和国」と称し組別競演の形で発足した。

それ迄は二代目綾之助師が力戦奮闘なさっていたが、それについては昭和三十三年七月の協会々報に「女義と本牧亭」と題して、当の綾之助師が書いておられるので要約すると「本牧女義興行の道を開かれた素女師から昭和二十八年にバトンを受けてからもう六年たった。始めは二十人位だったが、三十人になり、近頃は日によっては五十人位入るようになったのは嬉しい。過日の大雪の時も何人の方が見えた時は感激した。定席興行四日間はどうしても統けたいので御助力願いたい」という協会副会長としての一文であった。その二代目さんが、翌三十四年十一月に七十四才で急逝されたのは誠に残念であった。

これ迄の女義は全くの独立採算で、二代目さんの信念と、出演者の熱意と、本牧亭さん的好意、その上に御定連（中井さん・入舟堂さん・吉田さん、そして現在も物心両面に亘り押しをして下さっている高野さん）の皆様の並々ならぬ御支援で成立っていたのだが、その一つの柱が欠けたのである。早速、暮の

協会役員会で再建が協議され、宝塚のように組別競演がよからうとなつた。湊太夫理事長が素案を作り、猿三郎公演部長始め女義幹部が次のような案を練つた。

(1)会名を競和会とする (2)松竹梅藤桐の五組にフリーラの組を作る (3)入場料は百五十円で、前売リペートは五十円とする (4)組の責任切符は一日二十五枚とする (5)席亭と組の配分は、売上げの四分六とする（例えば百五十円一枚は、税金二十五円を天引きし、席五十円、組七十五円） (6)番組・ワリ（出演料）配分・運営等、各組独自に行うこと (7)代表者は定めず同人一同で処する (8)協会は庶務綾太夫を当分の間手伝わせる (9)箱屋給金は一日四百円、綾太夫は二百五十円とする等。

二月二十七日に本牧亭階下座敷にて結団式のようがあり、かくして昭和三十五年三月一日夕六時より、女義競和会は華々しく幕を開けた。第一声は「太十」京子・勝八、次に「新口」綾華・駒登久、「柳」清司・勝八、「安達」素庵・三生、トリは「油屋」の土佐廣・猿幸であった。客席はフリ三十九人、前売切符五十七人計九十六人という活況で、二日竹組は六十六人、三日梅組は百人、四日

松組は八十六人、計三百四十八人という、びっくりするような大入りであった。次いで四月は藤組単独、五月は桐組、六月松組、七月竹組、八月梅組という順で競演し、その五ヶ月の平均客数は一日六十六人弱、内フリの平均は三十二人強なので、前売は三十三人弱、各組四日間で百三十枚以上切符を売ったことになり大変な努力だった。以後、昭和三十七年四月に「競和会」改め「共和国」となつて二組が二日づつ競演となり、三十九年四月からは、三日間が組で後一日は特選会となり、この形で波はあつたが、一日約七十人のお客様を呼んで、昭和四十五年六月迄の十年と四ヶ月間続けられた。この年、協会が社団法人になり、協会公演部に移管され発展的解消をしたのであった。

この十年と四ヶ月は、本牧亭女義の華であり、苦闘の歴史であった。華とは、土佐広・小津賀・重之助・猿幸・三生などの各師が最円熟期であり、越道・綾之助・素八・駒竜・駒登久・津賀昇などの人が五十才前後の活力盛り、それに越駒・住若・糸三・弥周・素竜・紋教などの人々……。客席は、上手壁際に御定連方、講釈の松鶴さん・南鶴さん、そして岡田蝶花形さん、後は義太夫ではなく女義が好きで精勤というお客様などばかり。幕があくと「待ってました〇〇さん」と、あんまり待つてない人でも声をかけてくれる。間のいいカケ声・拍手。舞台も客席も樂屋も熱気が溢れていたように思う。苦闘と云うのは、當時興った経済重視・文化軽視の世相、テレビ

の普及、文楽の沈滞の時期に当るが、チリのようなワリ、切符の捌き等何れも大変だが、よくぞ頑張ったものだと云いたい。

私の手許に七冊の記録ノートがある。毎日の入場者の内訳と金額、前売切符の内訳と金額、席料の計算（税金がからんでやゝらしいもの）、ワリの算出と支払額（月と組により

違う)、その他の支出(箱屋・送料・印刷費等)がびっしりと書きなぐつてある。その他に毎月のプログラム三枚づつと、切符などが貼つてあるファイルが四冊と、折々の録音データと写真類があるが、惜しむらくは、その日の天候・演者の状態・客席の観察・ハブニングなどが記されていれば曇りなきものだが、今悔んでも遅い。

一寸こゝでノートをめぐり電卓を叩いてみよう。興行の打ち日は、正月は休みなので十一ヶ月で四十四日、十年と四ヶ月だから四五六日だが、実は四十四の三月の大雪で一日休みなので計四百五十五日。お客様さんは延三萬一千百六十人、年平均三千百三人、月平均二百八十二人、一日平均七十人強である。最も入った年は昭和四十年で、入らなかたのは四十二年。最も入った月は四十年の師走忠臣蔵で、初日百七十四・二日百三十九・三日百四十四・四日百四十六、計六百と三

たたたので連日お膝送りであった。師走はつでも入ったが、それ以外では四十年七月の桐組・素八会で、三百七十三人がある。最入った日は、四十三年六月四日の猿玉会で、二百二十二人(フリ九十四・前売百二十八)

がある。良くない方では、四十二年が最も少なく、一日平均五十九人強、不入りの月・日も四十二年で、十月の桐組・精進会は計百七十九人。これは二日続の大雨に祟られ、初日二十九人・二日二十七人と、十年の間で三十人を割ったのはこの二日間だけだから、これが響いたのである。

フリと前売切符のお客さんの割合は全くの五分、三十五人対三十五人。フリの一日最高は九十四人、最低は九人。切符の一日最高は百二十八人、最低は六人というのである。

出演者は切符の売捌きに苦労したが、月の最高は、糸三さんの百十二枚（三十五年七月の四日間）、一日では小素さんの五十二枚がある。因みに入場料金は、初め百五十円、三十八年三月から二百円、四十年九月二百五十五円、四十年三百円、四十五年四月に四百円と、何れも「諸物価高騰につき止むなく」と御願い申し上げている。従つて初めの百五十円の時のワリは、月によって違うが、口が三百円位で、トリが五百円位だから、今の感覚でも安すぎる。その元凶は税金である。一枚百五十円という、おとなしい料金から二十五円も取られるのである。もう時効だから隠さず申上げると、フリには税務署の半券を切るこれはやむを得ない。前売切符は半券を渡さない、すなわち脱税。一日平均二十五円掛け三十五人で計八百七十五円をこれで浮かしワリに廻す。トリー一人と口一人分のワリが出来るのだから大きい。私は常にびくびくしていてワリに合わなかつたが……。

ともかくこの記録を見て思うのは、十年の間に出演者で亡くなつた方もあつたが、仙廣さんという強力な人が加わり、若手も育ったし、お客様も少し顔ぶれが変わつただけで健在、御定連方は変わらずの御後援（四日間の定席以外にも「東都女義有名会」とか、個人の会の応援を沢山して下さつてゐる）で、まづまづの成績であつたが、永続の一因として、毎月決済で黒字もなければ赤字もない、が目につく。実にサッパリしている。その他私ごとになるが、初め一年位は協会からの手伝人であったが、その後正式に共和国の番頭に就任？したわけだが、その時私が出した条件は、うんと安い給金なら引受ける、だつたから直ちに受け入れられ、一ヶ月五百円で受けた。もう少し取れ、いや取らないなどのやりとりの後、三十八年の師走興行で、出演者三十数人のワリ分數万円を、会員の気持だからと頂くことになつた。以後毎年の師走興行で辞退したが聞き入れられず、四十二年迄五回頂戴したが、以後は絶対辞退だと云つたら、それでは毎月の余金の一割を取ることゝ決められたりのワリ四日分位を頂くことになり誠に心苦しかつた。ほんとに心優しき人達の集りであった。だから私にしては駆けずり廻つたつもりであり、今でも私に出来ることなら女義のお役にたちたいと思つてゐる。

紙数が尽き、当時の組編成一覧を割愛、次号をお目通しいただければ幸甚……。

## 第五回 豊澤仙廣賞

### 今 年 は 箱 屋 さ ん に

豊澤仙廣賞とは、豊澤仙廣前副会長（現名譽会員）が義太夫協会の設立と発展に多大の貢献をされたことを記念して、昭和61年に創設されました。規定では、「顕著な功労のある協会の会員で満島才以下の人、原則として一名」となっていますが、長年お世話になつた「本牧亭」の閉鎖という事態に直面した

本年度は、会員、特に若い正会員の中から推薦の声があがり、特別に床世話（箱屋）の小林敏子・戸叶琢通両氏に決定いたしました。小林敏子（大正4年生。昭和12年より床世話の仕事を始め今日に至る）

戸叶琢通（大正2年生。昭和30年頃より床世話の仕事を始め今日に至る）

療養中の豊澤仙廣前副会長も、この人選には殊のほか喜んでおられます。表彰式は12月21日、本牧亭での最終公演席上で、また、副賞の十万円は、河野田声常任相談役より贈ることになっております。

縁の下の力持ちで、いつもは表に出ないお二人に今回は無理やり登場願うことにいたしました。「おばちゃん、おばちゃん」と皆から頼りにされている小林さんには、鶴澤悠美・竹本綾貴世が話を伺い、戸叶さんには、本牧亭の思い出を綴つて頂きました。

### おばちゃんの話

#### 箱屋になる

どうして箱屋になったか、ですか。一人っ子で、父が急死したものだから。働く人なくちゃならなくなつたからでしょうね。

当時は、箱屋の数が多くて、競争もありま

したね。私なんかさんざいじめられましたよ。お茶いれて持つてくと、途中で持つてかれち

ゃうよね。私なんか、慣れないでしょ、家にいてお茶ついで貰つての方だったから。

女中さんはいなかつたけど、小僧さんがいて

雨が降りや学校も迎えに来てくれるし——イ

エ、お嬢さんなんかじゃないけど、ボーッと

してたから、だからお茶でマゴマゴしてるか

らまだるっこしかったんでしょ。初めヤ

ダナーと思いましたけど、仕様がないこれが

仕事なんだからやつてかなきゃならない。そ

のうち段々慣れましたけどね、結局は気を使

わなきダメなのね。段々気が練れて腹が立

たなくなるの、自分が悪いんだから仕様がな

いなんて思うようになつて。

そのうち、主人と橋渡しして下さる方があ

つて、それからずーっとですね。

#### 後継者

どうして後継者を作つておかないのでないのなんぞよくいわれますけど、結局、義太夫の会がないでしょ。自分がやつと食べてるのに、食べさせていかれないでしょ。働く人だつて、初めから「（収入は）どの位になりますか」って時代ですものね。

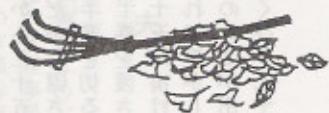
#### 行儀作法

昔はやかましかつたわね。中途半端な格好でお話なんか出来ませんでしょ。私達もちゃんと膝付いて。今は、膝が痛いからスッと立つたり座つたりできない、こんな風だともう長いことできないなあと思いますよ。

#### 箱屋の仕事

昔はご連中さんでもやかましかつたですよ。キレ場のところでチヨーンと入らないと、下りてきてから叱られるのね、気が抜けちゃうって。戦争前は、私たちでも拍子木は持たせられなかつた。終戦後、だんだん人がいなくなつて、口上もみんな言うようになりましたけどね。だから声なんか出来てませんよ。エエ、義太夫も少しだけお稽古したんです。家へ、ご連中さんが見えて、路太夫さんってお師匠さんがお稽古にいらしてたんですね。やか

（注・御主人は箱屋の新ちゃんこと小林新吉氏。昭和53年芸団協功労賞。昭和57年7月10日逝去。以後おばちゃん一人で頑張っています。）



ましかつたから、皆さん泣きながら、お稽古してましたよ。私は、ご連中さんが待ってらっしゃると気が気じゃないんですね。つい、お師匠さん、今日はお稽古結構ですね。

しまいに、義太夫は難しいから止めますって言つたら、難しいから面白いんじゃないって皆に言われましたけどね。

その後、綾華さんで少し・・・綾華さんは「幼稚園」のお稽古して下さるから、自分でできなくとも、理屈は分かってくるのね。そのうち、綾華さんは目が悪くなつて亡くなつちやつたんだけど。

### 昔の東京の義太夫界

今は、女の方がほとんどですけど、昔は男の方もご連中さん持つたり、踊りの地方やつたり、素淨瑠璃語つたり、大勢さんいらしやいましたよ。

東京の義太夫っていえば、越駒さんなんか「私のような義太夫語つちやダメよ」とてお弟子さんによく言つてらっしゃいましたね。結局ウケル様に語るから。私なんかが子供で父に連れて歩かれた当時は盛んでしたね。バーフとかんざし落としたり・・・子供だからそういうのが面白くて行ってたけど、そのうち飽きてくるでしょ、そうすると何か買ってもらって食べて、よく連れていかれましたよ。父は初めは素人で語つてましたけど、やめてからは聴く専門、私をダシにしちゃ聴きに行って。東橋亭だとかバーテー館だとか、随分連れて行かれましたよ。そう、私が六つか

七つ時分だから、大正ですね、まだ昭和にはなつてしまませんでした。

### 失敗談

東劇がまだあつた頃、昭和10年か11年頃かしら、芝居のお手伝いに初めて行つたのね。左団次さんの辻占の後が三番叟で。お湯呑もって下りようしたら、下からどいてどいてって。左団次さんつていったら神様みたいな方でしょ、泡くつて脇へ寄つたら、奈落へ下りちゃつて、舞台を通り抜けでお茶出したりしたものだから、頭取部屋へ呼ばれて、三秒遅れたと叱られましてね。それから、三番叟が出る度に冷や汗！三味線アベコベに置いてみたり、失敗談ならいくらでもありますよ。

### 戦争

疎聞したり焼け出されたり、チリヂリバラバラでしたけど、戦争が終つた年の正月にアチユチ連絡してたの。ヤミ屋さんなんかする方もあつたけど、うちは・・・のんびりね、何をしていいか分からぬで、毎日ヤミ市見に行つたりばっかりやつてたの。それで遊んでても仕様がないから、(義太夫の)会をやろうよなんて。それで疎聞した先の分かる人のところへ手紙出して。

着物持つてっちゃ田舎へいってお米と取り替えてきました。一時、どんどん会があつてよかつたとき毎月着物こしらえてたから、着物いっぱい疎開してたの。うちのお父さんを晶員にして下すった方が、護符を書いて下

すつたの、「おかみさんこれタنسの中へ入れときなさいって。入れときやいいんだよ、着物がいっぱいできるから」って。半信半疑でいたの。そしたら、毎月出来るようになつちやつたの。だから月に二・三回は田舎へいったの。主人も働いて言って、アメリカの荷運び、それを2日ほど朝早く起きて手伝いに行つたけど、帰つてきたら「アーバカバカしい。戦争負けた国の人間なんかを・・・」って行かなくなつちやつて。それから、義太夫やつて連絡とつて。

### おじさん

怒りっぽくてわがままな人だ。たけれど、人のことは陰で言わないしね、陰のことは一生懸命でやつたの。陰ひなたないのよね。私は人のを待つてられないほうだからだめなのはね。モウいいや自分でやつちやおなんて思う位だから。納会でお酒なんかだと、仕事が終らないうちは飲ませないで下さいなんて、生一本過ぎるくらいだった。大勢さんがいつも平気で怒鳴りつけられちやうのよ。そこで口答えすると余計大きな声だすから、恥ずかしいから黙つてるのね。それで、忘れた時分に「おさらい」するの。そうすると黙つて聞いてますよ。人のいる前で言うとアタシが笑われるんじゃなくてお父さんが笑われるのよっていうと、だまーって聞いてる・・・。怒りんぼだつたからね、幕の上の方が早いと

(1989.11.20)

か遅いとか。七段目は、幕内で口上いって口上のツケといっしょに幕が開かなきゃいけないの、お囃子が終わると同時に幕がスタートと上がるようにならないと、早く開ければ三人侍がずっと顔をさらさなくちゃならないって。いまの幕はボタン押すから一寸無理ね。昔のは手加減できますよね。

若い人が伸びてくれれば義太夫界も華々しくなるんだけどなあってよくいってたの。

### 本 牧 亭

戦後は、上野の梅川亭とか、人形町の落語なんかをやった金車亭あたりで素人さんの会をやりましたけど。本牧亭へ来たのは、二十三年頃でしたかね。プロの方が始められる一年ほど前でした。本牧亭では、「土佐会」とかお師匠さん方の納会とか、素義の会も多かったですよ。

(おばちゃんの話は漸く本牧亭までたどり着きましたが、紙面の都合でこの続きを後日のお楽しみとさせて頂きます。編集部)

一口メモ  
大正14年刊「義太夫名鑑」によれば、東京義太夫節床話競会として31名、貸席及び俱楽部として日本橋俱楽部、琴平俱楽部・团子坂俱楽部・牛込俱楽部等々58軒が記載されている。現在、東京の義太夫界では今回仙賛賞を受ける一人が残るのみとなつた。

## 義太夫と本牧亭

戸 叶 琢 通

本牧亭の想い出のようなことを書けというお話で、ベンをどりました。協会は事務所に本牧亭の一室を使っていましたこともあるので、全く義太夫と本牧亭では戦後何十年もの歴史があるわけです。然しまも私にも私なりの何とも懐かしいことになってしまふ想い出がいっぱいあります。

極く古い昔のこと、一階の奥を将棋の会所にして営業していました時分、私も好きな家の方として、自分でできてしまつてのことですが、席料なしで居たかもしれません。中原誠の先生の高柳八段が主任で、ときどきトーナメントの大会等もありました。(その時分、私は三級の認定でした。)亡くなった馬琴先生と対局したこともあります。講談組合会長の山陽先生や田辺一鶴先生、古今亭志んさんも見えて居りました。山陽先生門下の品川連山さんが四段で、半プロで常々帳場に座っていましたし、もう一人、土橋亭りう馬さんが受持ちでした。御自分で一日りう馬の会を持って、御晶真に講談界のウワサ、毒舌で受けていたようです。本牧亭といえば、どうしても講談の先生方のお話がしたくなつて

しまいます。御年配の神田松鶴(伯山の実子)先生は、義太夫を駒登久師匠の糸で「十種香」「鮓屋」「鈴ヶ森」「油屋」等をやっていたように思います。故人の一龍斎貞丈先生には由っちゃん共々可愛がられました。(故酒井由雄氏 よっちゃん、よっちゃんと親しまれた荷上の先輩です。)こう書いてくるとそれからそれへと尽きない想い出が本牧亭とつながります。本牧亭の大旦那が、未だ御存命の時代からの出入りの人間ですので、本牧亭主催の旅行会も、度々仲間入りさせて貰いました。神奈川の阿夫利神社へ同行したときは、講談の先生方が大勢行きまして賑やかなことでしたが、講談界も何處かへ鞍替えして行くことでしょう。我々の義太夫界も先日の祖先祭での吉川名譽会長さんのお言葉通り、舊状を振り切っての新しいスタートを作り出して行きたいものです。そして又、それは当然出来ることと思います。若い、義太夫を愛する有望な女義が今では、十分のびて来ているではありませんか!明治から大正への昔話の華やかな、猫も杓子もの義太夫節時代とは違った意味の繁栄、平成の時代に適わしい繁栄、それがあると思って居ります。





待ってました、御両人!!  
(天下御免の舞台より)

「印度國よりはるばると やって来ました  
エレファント……」こんな義太夫節(?)  
が、八月三日から二十六日まで新橋演舞場の  
芝居「天下御免」の中で演奏されました。こ  
の芝居は、昭和四十六年から放送された同名  
のNHKテレビ時代劇の舞台版で、同じNH  
Kのドラマ「夢千代日記」などの脚本を書い  
ている早坂暁氏の作・演出、松竹の製作によ  
り、松竹の制作によ

## 新橋演舞場 「天下御免」に出演して

鶴澤 悠美

るもので。お江戸の大天才平賀源内(林隆  
三さん)と愉快な仲間たちが大暴れ、象もで  
てくる『スーパー時代劇ミージカル』とい  
うことで、木遣りからビートルズ、演歌、井  
上陽水、ベートーベンの第九など様々な音楽  
が並んでしまうというものの凄さです。その中  
で竹本駒之助師匠が娘義太夫の役どころで、  
鬱をつけて扮装し、歌舞伎の竹本さんのよう  
な形で芝居に絡み、狂言まわしの役割を果た  
した訳です。私もその脇で扮装して三味線と  
胡弓を弾かせて戴きました。(たった一回で  
すが、師匠が風邪で声が出なくなってしまった  
と三味線が交替してしまったという嘘のような  
オマケがつきました!)詞草は最初に書いた  
ような七五調でも浪曲のような現代語に近づ  
いた感じのもので、節付けは師匠や早坂さん  
にお伺いを立てながら私がいたしました。語  
感として義太夫節のフシにはノリにくい詞草  
ではあるし、洋楽系統とのつながりも考えな  
くてはいけないし、場面の状況にもそぐわな  
くてはいけないし、十日ほどの稽古の間に本  
がどんどん変わってあちらこちらから多量の  
注文が私の肩にのしかかってくるので、初日

が開けてから毎日徹熱が出るという最悪のコ  
ンディションとなってしまいました。慣れな  
い鬱と異例の昼夜全幕出突張りという情況  
下、一本三千円の栄養ドリンクを飲みながら  
がんばりました。二日目には坂東玉三郎丈が  
観劇にみえ、「義太夫がよかったです」と感想  
を述べられたそうで、まわりの方々の評判も  
上々だったようだし、楽日までつとめること  
ができたよかったですと思っています。師匠の  
お力のお蔭で何を語っているのか聞きとり易かったと皆様  
にいわれて、現代語に近い平易な言葉もそう  
違和感なく義太夫節になるのだという確信の  
ようなものを持つことができたのが何よりも  
収穫でした。いい本があったら、今度是非  
一段丸ごとふし付けしてみたいなど、その機  
会を虎視眈々と狙っている今日この頃です。

NHK教育テレビ

『芸能花舞台』に出演します

葛西聖司アナウンサーの爽やかな司会でお  
馴染、NHK教育テレビ「芸能花舞台」に女  
流義太夫が登場いたします。

新版歌祭文  
野崎村の段

竹本朝重  
竹本駒之助  
鶴澤寛八  
ほか若手大勢

協　会　の　動　き

'89年11月まで

6月16日	芸術祭小委員会	於事務局	7月21日	義太夫協会公演会企画・構成・講演―竹内道教相談役「物語の展開」	於本牧亭	9月20日	教師のための義太夫講習会企画・構成・講演―菊池明相談役「義太夫と歌舞伎」	於本牧亭
6月20日	常務理事会	於事務局	7月24日	義太夫教室第42期(初級入門)ス)閉講式	於本牧亭	9月21日	義太夫協会公演会	於本牧亭
6月21日	教師のための義太夫講習会「義太夫節のABC―三味線篇」講師一 吉川英史名誉会長	於本牧亭	7月24・25・26日	女流後継者育成事業妙心寺研修(野澤喜左衛門師指導)	於演舞場スペース・アルファ	9月21日	義太夫節保存会平成元年度文化財保存事業東京都補助金交付申請書提出	於事務局
6月23日	本牧亭関係諸荷物調査	於本牧亭	8月20・21日	女流後継者育成事業妙心寺・春の富士研修(野澤喜左衛門師指導)	於國立劇場	9月22日	平成元年度民間芸術等振興費補助金(青少年等芸術普及事業)交付申請書提出	於事務局
6月23日	終演後、本牧亭閉鎖問題について緊急集会	於本牧亭	8月22・23・24日	女流後継者育成事業妙心寺・春の富士研修(野澤喜左衛門師指導)	於國立劇場	9月27日	義太夫節保存会平成元年度文化財保存事業東京都補助金交付申請書提出	於事務局
7月3日	経理部会	於事務局	8月25日	同右	於さらしな乃里	10月10・11・12・13日	女流後継者育成事業春の富士研修(野澤喜左衛門師指導)	於國立劇場
7月5日	公演部会	於事務局	8月25日	同右	於さらしな乃里	10月15日	祖先祭	於回向院
7月9日	義太夫協会通常総会	昭和63年度事業報告・収支決算報告、平成元年度事業計画・予算案を審議、原案通り可決した。任期満了に伴う役員改選を行なった。(3頁参照)	8月25日	同右	於さらしな乃里	10月16日	義太夫節保存会平成元年度文化財保存事業東京都補助金交付決定芸術祭参加公演総稽古	於國立劇場
7月17・18日	女流後継者育成事業妙心寺研修(野澤喜左衛門師指導)	於文明堂	9月1日	常務理事会	於文明堂	10月20日	平成元年度文化庁芸術祭参加「本牧亭お名残り・女流義太夫演奏会女性が語る時代と世話の女」先代萩・野崎村の演奏と池田弘一相談役の話で進行した。(6頁参照)	於國立劇場
7月18日	義太夫節保存会平成元年度助成金交付決定通知	於国立劇場	9月4日	芸術祭実働部隊会議	於文明堂	10月17日	芸術祭参加公演総稽古	於國立劇場
7月20日	定例理事会	於本牧亭	9月4日	義太夫教室第4期中級(語りコ1ス)開講現在25名受講中	於演舞場スペース・アルファ	10月20日	平成元年度文化庁芸術祭参加「本牧亭お名残り・女流義太夫演奏会女性が語る時代と世話の女」先代萩・野崎村の演奏と池田弘一相談役の話で進行した。(6頁参照)	於本牧亭
9月11日	義太夫協会公演会	於本牧亭	9月11日	公演部会	於事務局	9月15・16日	女流後継者育成事業妙心寺・春の富士研修(野澤喜左衛門師指導)	於演舞場スペース・アルファ

(1989.11.20)

義太夫協会会報 第46号〔特集本牧亭〕

10月21日	第二回「東西若手交流会」大阪より 住蝶・友由貴・寛也・寛輔が出 演	於本牧亭	早稲田大学演劇博物館様 演劇年報'89年版
10月17日	役員登記完了		
10月30日	昭和63年度事業報告・決算報告 平成元年度事業計画・役員登記完了届け等、東京都教育庁に提出	猪股 英紀様	景山 正隆様 義太夫カセットテープ 多数
11月9日	公演部会	於事務局	鶴澤宏太郎様 冬樹社刊『勵進帳いろいろ』
11月13日	常務理事会	於文明堂	小林 敏子様 アガリ糸 多数
11月20日	義太夫協会会報第46号発行		豊澤猿三郎様 肩衣 10番

おめでとうございます

## 西川古柳師 地域文化功労賞

一来年2月には女義と共演――

東京都無形文化財「八王子車人形」の四代家元・西川古柳師が、地域文化功労者として文部大臣賞(文化財保護)を受賞されました。全国で81名、東京都で3名の受賞者のひとりに選出されたものです。良き後継者にも恵まれ、近年は海外での公演が多い西川古柳座、今後益々御活躍されますように。

来年2月20・21日両日、国立演芸場での女流義太夫公演にゲスト出演、「日高川」「鳴門」を見せて下さいます。これは、江戸・東京博物館の資料として記録される予定です。

■ 加藤 清保氏 (賛助会員)	平成元年5月逝去
■ 竹尾 一休氏 (賛助会員)	平成元年9月19日逝去
■ 横山 敏雄氏 (顧問・大阪トヨタ自動車株式会社代表取締役)	平成元年9月21日逝去

## 計 報

高野俊雄様には、右の印刷一式をご寄贈頂いただけでなく、編集上のアドバイスも賜わりました。又、本号の別冊として皆様にお届けする「思い出のアルバム」は、レイアウトまでして下さいました。

計報というものは、悲しくつらいものですが、今回は、義太夫界にとって特に関係の深い方ばかりで本当に心が痛みます。素人義太夫として長年活躍された方、義太夫協会の社団法人化(昭和45年)以来役員を勤めて下さった方、物心共に義太夫界を応援して下さった方、そして女流義太夫の、世界の最高齢現役楽家としてギネスブック認定の団司師、これまでの御尽力に感謝するとともに、御冥福を心よりお祈り申し上げます。

会報28号(昭和58年8月26日発行)に内山美樹子氏の「若さと歴史 豊竹団司の芸」と団司師聞き書きが載っています。

享年98才

豊津院釈尼団跡

■ 藤田 昌子氏 (参与)  
平成元年9月22日逝去

■ 佐伯 勇氏 (顧問・近鉄グループ総帥)  
平成元年10月11日逝去

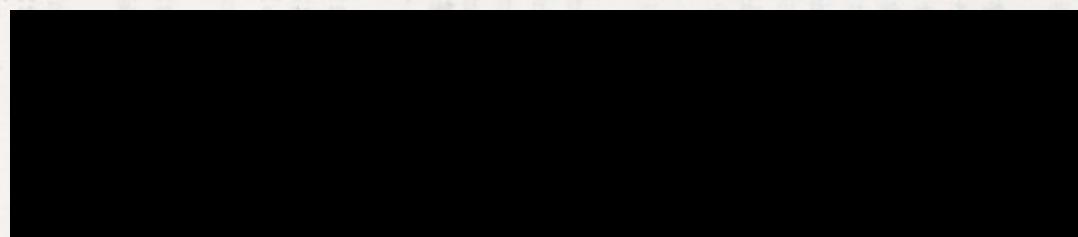
■ 竹本 素昇師 (元正会員)  
平成元年10月5日逝去

■ 豊竹 団司師 (義太夫節保存会副会長)  
平成元年11月3日逝去

■ 竹本 素昇師 (元正会員)  
平成元年10月11日逝去

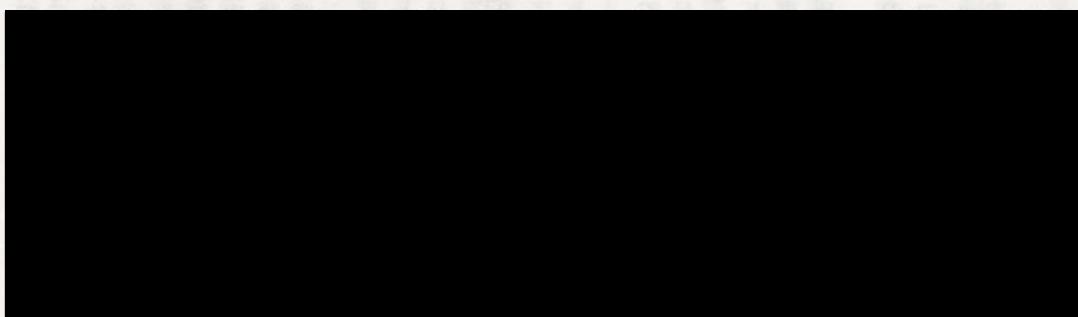
■ 竹本 素昇師 (元正会員)  
平成元年10月5日逝去

## 新入会員御紹介（敬称略）



訂正 45号掲載の関口滝雄氏は特別会員でした。お詫びして訂正致します。

## 住所（住居表示）変更



## 会員名簿 '90 整備中

- \* 新しく役員も決まりましたので、来年早々に会員名簿を発行の予定です。
- \* ただいま整備中ですので、住所・電話等変更の方は、至急御一報下さい。
- \* 広告欄もあります(A6版) スポンサーを御紹介頂ければ幸いです。

幸いです。46号本文と照らし合わせて御覧頂ければ  
幸いです。  
号、本牧亭40年の区切りとなると、これでも  
納まりきれずにカットした部分が相当量あり  
ました。追々資料として掲載したいと思いま  
す。今回痛感したのは、記憶の曖昧さと資料  
の大切さでした。ひとたび活字になるとそれ  
が事実になってしまふことが多々あります  
で(急病の代演など)この小さな会報の編集も  
責任は軽くないと思う次第です。別冊の「思  
い出のアルバム」は芸術祭参加公演のプログ  
ラム掲載のものを、女義後援会の御好意によ  
り皆様にもお届けできるようになったもので  
す。

## 編集後記

週に三日くらいでよいのですが、事務局の仕事を手伝って下さる方はいらっしゃらないでしょうか。  
勤務時間 十一時～四時  
勤務場所 義太夫協会事務所  
(新橋演舞場 地下二階)  
給 購 料 時給 六百五十円  
交 通 費 全額支給  
年令・性別不問。出来れば古典芸能に興味をもった若い方歓迎!  
詳細は (五四一)五四七一まで

## 職員(パート)募集!

# 〔思い出のアルバム〕

女流義太夫と本牧亭



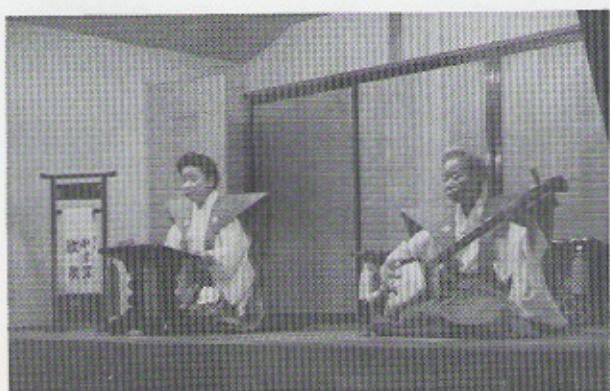
二代目 竹本綾之助  
竹本素女のあとを引き継ぎ、  
本牧定期公演の基礎を築いた



竹本 素女  
昭和25年 講談定席「本牧亭」に  
女流義太夫進出のきっかけを作った

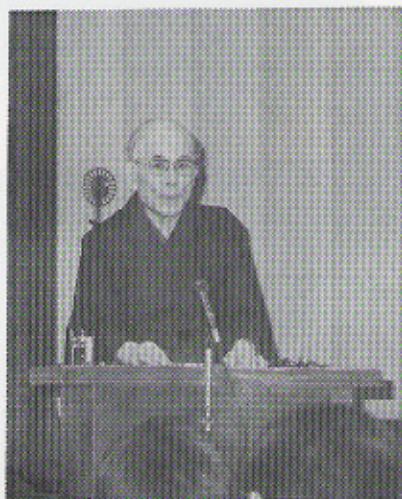


豊澤 猿幸 華麗・繊細・・・不世出の名人  
(左より土佐廣・猿幸 ツレ弾津賀昇・幸純)



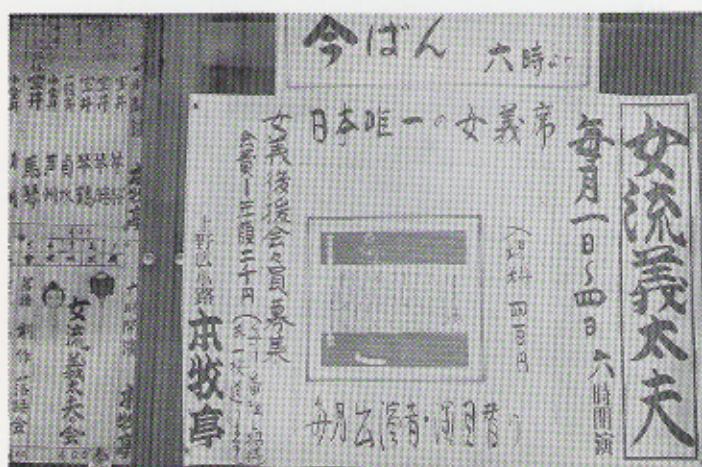
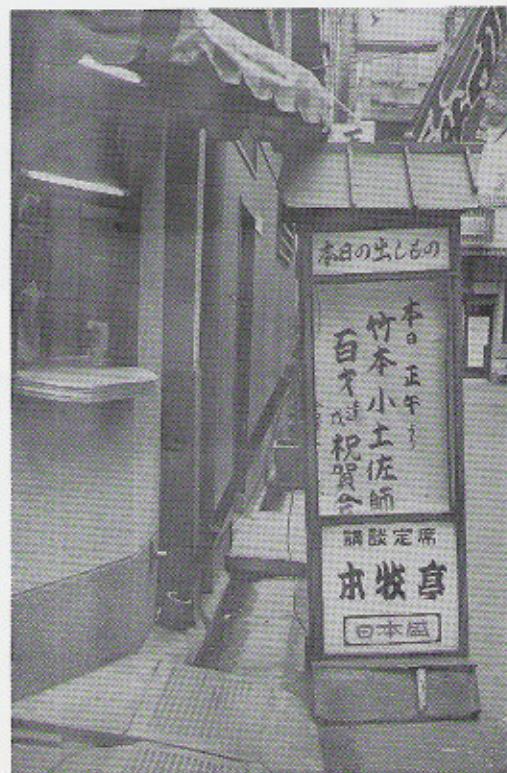
竹本小津賀・鶴澤 紋教  
永年の名コンビ  
「油屋」「質店」が耳に残る

竹本 土佐廣  
昭和57年 女流義太夫初の人間国宝となる



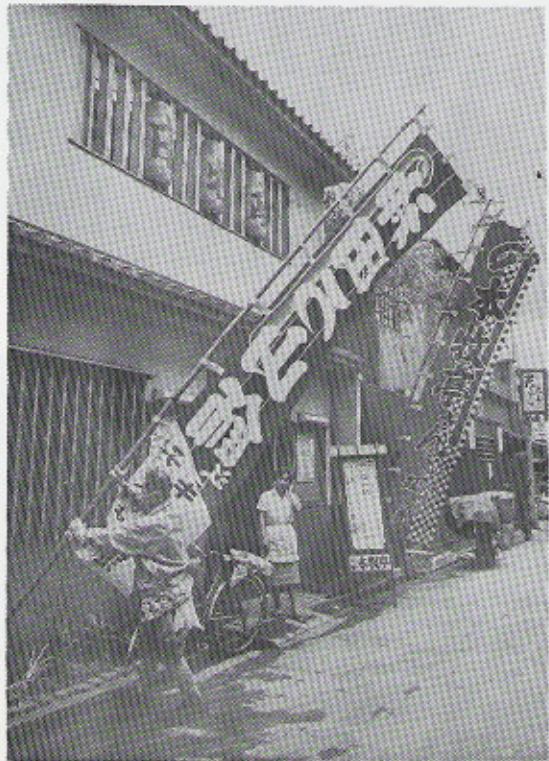
吉川 英史（義太夫協会名誉会長・前会長）  
机台を前に講演・教師のための義太夫講習会

昭和46年  
女流義太夫には長寿者が多い





御常連 いつも席は決まっていた  
(左より中井・入船堂・武田・末松・吉野各氏  
手前は「女義盛観物語」の著者・岡田蝶花形氏)



改築前の本牧亭入り口（昭和38年）  
建物は変わっても、本牧名物・下足の  
おじさんは今とちっとも変わらない



豊澤 仙廣  
本牧定期公演中興のため  
物心両面で多大な尽力  
(義太夫節保存会会長  
義太夫協会前副会長)

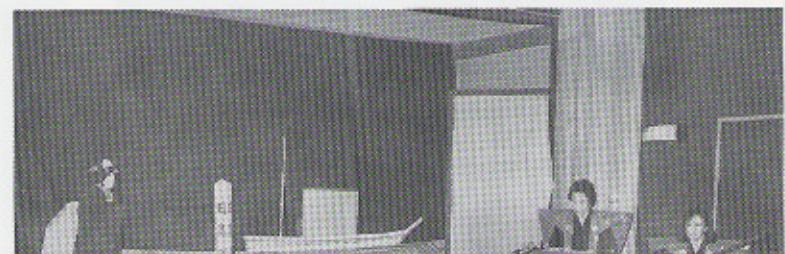




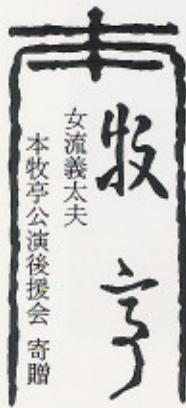
竹本 重之助  
近頃のもの  
で色々とおもひつかう



鶴澤 三生  
豊澤 猿幸と並んで  
三味線の二本柱  
いまの若手は  
みな三生の  
指導を受け  
成長した



時には人形との共演も  
ハ王子車人形 ⇒  
乙女文楽  
↓



最近は客席の様子も変ってきた  
若いお客様、外国人の人も・・・

